

て居るかを研究しなければならぬ。合同の釣合は、如何に最眞目に見ようとしても、不安定のものであるに違ひない」。

それで私達は此事を次の如く結論する。

「私達が現在知つて居る範圍内に於ては、獨占附屬の一大分野があるが、此分野以外にモウ一つ他の分野ありて、その内に於ける競争は正當なる條件の下に在る限り、永存的社會力である。尙ほ私達は、産業上の競争が自滅的のものであり、而して獨占への進行上に於ける必然的經路であるといふことを主張するところの人々に、之が立證の責任を負はせる」。

了

滿蒙砂糖事情

本論文は大正十二年二月十一日紀元節の佳辰に當り發表したる滿洲懸賞當選文なり

田 中 雄

目 次

第一章	滿蒙砂糖事情の概観
第二章	輸移入糖
第一節	南滿の輸入糖
第一款	總 說

第二款 輸入糖品種別

1、日本糖	2、香港糖、	3、日本糖と香港糖との
差異	4、瓜哇糖、	5 移入支那産糖
第三款	砂糖輸入港別（略）	
1 大連	2 營口	3 安東

第四款 南滿與地各市場（略）

1 奉天 2 鐵嶺 3 長春

第二節 北滿の輸入糖

第一款 總 說

第二款 北滿需要糖の品種

第三款 輸入徑路

第四款 輸入糖の数量的考察

第五款 戰時北滿の砂糖事情

第六款 東支線と砂糖分布狀態

第七款 北滿の砂糖市場（略）

1 哈爾濱 2 雙城堡 3 齊々哈爾

第三節 東部內蒙古の輸入糖（略）

第一款 總 說

第二款 東蒙に於ける砂糖種別

第三款 輸入徑路及び市場

第三章 滿洲の土產糖

第一節 南滿の甜菜糖

第一款 總 說

第二款 南滿の風土と甜菜

第三款 甜菜の經濟試驗

第四款 南滿の甜菜と他糖類との比較

第五款 南滿洲製糖會社の概況

第二節 北滿甜菜糖

第一款 阿什河製糖廠

第二款 呼蘭製糖廠

第三節 滿洲の移輸入糖と土產糖との比較

第一章 滿蒙砂糖事情の概観

滿蒙の砂糖は古くは支那產糖によりて其需要を充し居れども香港糖が發達してより殆んど英國糖商の獨占的勢力下におかるゝに至れり、然るに日露戰争後日本糖の活動を見香港糖と激烈なる競争を繼續し遂に歐洲大戰中彼の如く根柢強かりし香港糖を凌駕し永へに滿蒙糖界の雄たらんとせしが、戰後再び香港糖は其勢力を挽回し來りて今や寧ろ香港糖の方便位を占むるに至れり。支那產糖は相當量輸入せられ現時多少の活動をなせども其勢力前二者に及ぶべくもあらず次第に減少しつつあり。輸入糖として勢力あるは香港糖と日本糖なり。

尙ほ北滿に於ては浦鹽港又は西伯利鐵道により露本國糖の輸入多かりしが大戰亂より本國政治の紊亂と産業の衰頹とを來し今や其の數量は激減し更に全く杜絶し依つて此等北滿西伯利に於ける露人の需要に對し瓜哇白双の

輸入あり又南滿製糖會社の原料用として爪哇、黃双、中双の輸入を見たり。乍併北滿露人に對する爪哇白双の輸入は露國混亂時に於ける應急的需要と見るべく南滿製糖會社の原料たる爪哇黃双も亦滿洲甜菜の好成績を挙げ確立するに及びては其重要度を減すべし。

以上は凡て輸入糖なれども滿洲其土地に於ても製糖事業行はれ稍々古くは北滿に阿什河製糖廠あり近年に至り同じく北滿に呼蘭製糖廠起り續いて南て滿奉天に南滿洲製糖會社出現し三者共に甜菜を原料とし新式の機械設備によりて製糖す。

此に於て滿蒙の砂糖は輸入糖と滿洲土產糖とに大別し又見方を換へ南滿の甜菜糖を重視し輸入糖の兩雄たる日本糖、香港糖と共に現時滿蒙の糖界は此等三者の鼎立狀態とも見るべし。然しながら輸入糖は其歴史古くして而も其數量甚だ多く土產糖は其歴史新しくして其數量は未だ少く從つて現時最も考察すべきは輸入糖たる日本糖と香港糖となり。

第二章 輸入糖

輸入糖、は之を地理的に(一)南滿の輸入糖(二)北滿の輸入糖(三)東蒙の輸入糖に三別すべし、南滿にては奉天を中心とし京奉、南滿、安奉三線に連絡する砂糖貿易を指摘し大連、營口安東、大東溝の四開港場は此の圏内に屬す。

北滿の砂糖貿易は哈爾濱を中心とし浦鹽其他の露領各商業市、東支線、烏蘇里線、黑龍江鐵道、黑龍江、松花江、等に接續する砂糖貿易を意味し從來の政治的露領なる黑龍沿海地方をも北滿圏内に包含し考察するを便とす歴史上より地理學植物學上より更に經濟上より論究するに當りては支那領北滿とは不可分の關係にあり日本の經濟的勢力が次第に北進し北滿より黑龍沿海地方へ伸展し行かんとする今日、對滿蒙政策を論ずるものゝ注意すべき事なりと信ず。此貿易圏内に屬するものに滿洲里、綏芬河、哈爾濱、三姓、愛琿の五開港場あり。此の外間島に龍井村、琿春の二開港場あれども主として朝鮮に對するものにし

て砂糖貿易上重要ならず。

次に東部内蒙古の砂糖貿易は哲里木盟、照烏達盟、卓索圖盟、錫林郭勒盟の四盟に於ける砂糖輸入状況を指稱す。南滿の砂糖貿易には日本の色彩濃く北滿には露國の傾向著しく東蒙は支那蒙古的とも稱すべきが前二者に比し遙に發達せず前二者の影響を蒙りて存立す。

第一節 南滿の輸入港

第一款 總 說

古來滿洲の需要糖は南支那產糖に限られしが香港糖に壓迫せられたり。即ち香港糖は(一)營口より遼河を遡り(二)安東より鴨綠江を遡り又は安奉線地方へ(三)芝罘より民船により天津沿岸を巡り更に滦河より承德へと進入し南滿、内蒙古を席捲し北滿に伸びたり。日露戰

前は日本糖全く手をつけず戰後に至り始めて當地方進出を企て次第に勢力を得、歐洲大戰前香港に伯仲し戰時遂に彼を凌駕し大連、滿鐵沿線の如きは殆んど獨占に近き盛況を呈したれども最近再び販路を奪回され彼六に對し我四の割合なりと稱せらる。

香港糖は營口を、日本糖は大連を本據とし安東には香港糖の勢力日本糖に勝れり。南滿砂糖貿易上最も重要にして對照の面白きは營口と大連となり。安東は其地位遙に下りて將來朝鮮甜菜糖の發達したる時重要度を加ふべし。太東溝は少量の輸入を見るに過ぎず重要ならず。

今外國糖の南滿輸入額を示せば次の如し

(支那海關續計摺建)

年次	種 類				入 港 別			
	大正	赤 糖	白 糖	水 糖	合 計	大 連	營 口	安 東
1	一四、三八	三三、六五	三、七五	五九、七八	八三、〇六	二六、〇八	三、八三	
2	一〇、三九	二五、三五	一七、九七	三五、二六	六三、〇六	二七、四八	二九、八二	
3	二六、八六	二二、八九	一五、四八	三五七、〇六	二二、四九	一九、八七	二六、〇五	

4	一五、四三	二四六、七二	一七、四八八	三九、七二	一六二、五五七	二〇五、五三六	三、六元
5	一五、二八	三五、五一	一七、〇四二	四〇九、七八三	一五、八二九	三四、一六五	三七、七九
6	二二、六〇二	五八、〇八七	二〇、八七一	七四、五〇	四九、五一	一八五、三〇五	四九、三〇四
7	二〇、六九	八六、六三二	二六、三二一	九四、六三	七五、六九	二〇四、一六二	三、八二
8	二九、七六	四七、四五	二七、五二	五四、四七一	三六〇、六四二	一七四、三八三	二九、四六
9				二七〇、二五	一〇〇、五〇四	一三二、六五三	六、九七九

(註)總じて赤糖に増減なきは畢竟營口の背後

市場たる東部内蒙古、遼河以西一帯及び沿線各地方に於ける消費狀態に變化なきを示すものにして精糖は之に反し漸増の傾向を辿れり。これは日本糖の販路擴張されたると需要が上物に向ひたる一證左なり。

大正六年以後著しく其數量増加したるは南滿製糖會社創立され原料糖を臺灣爪哇に仰ぎたると露國政府の無稅輸入令發布せられ日本双目糖及び爪哇白双の大量輸入ありしによる尙ほ八年九年の總額に於て激減の跡を見るは前年度持越品の過多なりし反動並に財界恐慌の波動を受けて取引停止したる結果なり。

第二款 輸入糖品種別

第一 日本糖

日露戰後大日本製糖會社は三井、鈴木、湯淺諸會社の後援を得同社大里工場品を以て大連に輸入し更に營口に販路を開拓せんと欲し香港糖と激烈なる競争を演じ彼の強靱なる商策と優秀なる品質との爲一時不振に陥れるが其間品質の改善に努め彼に倣ふて油氣ある足重品を製造せり、恰も當時香港糖は餘勢を驅りて北滿の開拓に専介し南滿市場を開却したれば其虛に乘じ販路を蠶食し明治四十三年末には臺灣製糖會社は三井を一手販賣店とし増田商店も亦明治製糖會社品を負ひて參加し爾來攻勢に轉じ歐洲大戰中には遂に彼を凌ぎ

て北滿に伸び大正六年には五十四萬擔てふ未曾有の記録を作れり、大日本、明治、臺灣三社の外近年帝國、鹽水港、新高等各社の製品輸入せらるれども其數量未だ前三者に及ばずと云ふ。即ち日本糖輸入數量を滿蒙實業彙報十年十二月號所載について見れば（擔建）

年次 大連 營口 安東 計

1	九五、三六	—	二六、五三	一三、五九
2	二九、六五	—	二六、四二	一四、一七
3	六、三〇	三、五五	一九、四七	二〇、二三
4	一三、二六	一〇、九〇	二〇、六七	一三、八四
5	一六、七七	一九、四九	一六、五四	二四、五〇
6	四六、〇五	二、三六	四七、四四	五三、八三
7	三〇、八六	一八、〇五	二六、四七	三七、三六
8	一六、五七	不明	八、四四	一九、九二
9	一九、三六	三、九五	一、三五	一九、六五

右表には冰糖、角糖を包含すれども大部分は精糖なり。

第二 香港 糖

香港糖は太古怡和兩洋行の製品にして滿蒙

に供給する種類は精糖、赤糖、冰糖にして油氣に富み支那人の嗜好に適し乾燥せる滿洲の風土に堪へ日露戦争迄獨占の勢威を振ひたり歐洲大戰中日本糖に壓迫せられたるが最近再び挽回したれども同糖は他の支那地方の如く永く當市場に其勢力を維持すること困難なるべし。日本人の勢力加はると甜菜糖の勃興とに壓せらるべければなり今香港糖大正元年以降の輸入状況を滿蒙實業彙報十年十二月號について見れば次の如し。表中其數量精糖と赤糖とは兩者相半せり。

年次 大連 營口 安東 計

1	一、四四	二〇、八元	八、六四〇	二九、六三
2	二九、八四	一七、三六	二、七〇〇	二九、八八
3	五四、四六	一九、三六	六、五八	二五、三二
4	三七、七九	一九、六五	一〇、九六	二四、三二
5	四三、五三	二〇、〇六	二、三五	二五、八三
6	一六、二七	一四、三一	一、八九〇	二〇、九二
7	一七、一九	一八、〇七	五、三五	二〇、八四
8	四、〇七	一六、〇〇	二九、四九	二〇、四三

9 四、七六、一四、五〇 八、三五 一、六、五五

日本糖に比較すれば九年度全數量に於て略々相等しく日本糖の増加傾向なるに對し漸減の徴を示し日本糖の大連を本據とするに對し營口を根幹となす等一目瞭然たり。

第三 日本糖と香港糖との差異

(一) 爲替關係 先づ爲替關係の砂糖賣買上に及ぼす影響を考ふるに香港の英商は瓜哇原料糖を買入るゝにあたり現物を直接支那に持ち來り之を兩にて保有するが故にギルダより兩への爲替勘定をなせば足る、然るに日本商は買入砂糖をば圓にて保有し、更に支那へ輸出する時兩にかへ斯くてギルダより圓圓より兩へと二重の爲替勘定をなさざるべからず。斯る複雑なる爲替關係は時に有利なる事ありとするも概して不利益なるは免れざる所なり、

(二) 供給方法 商品の供給方法を見るに日本糖は確固たる方針の下に永久の策を採ることなく不規則にして支那へ輸出することあれ

ば又時には其一部を移して歐米其他種々なる地方へ積出す。之に反し太古、怡和は飽くまで支那本位に膠着して専心販路の擴張に従ふ。日本糖の歐洲向輸出の如きは稀に利益を博し得たりとするも永續性を缺くが故に常華たる支那滿蒙市場を開却し彼のために壓迫排撃せらるゝは當然なり。

(三) 品質 南支那地方にては日本と同様「サラサラ」したる精糖を好むと稱せらるれども一般に足重品として油氣即ち粘性と濕性とを有するもの最も愛好せらる。殊に支那滿洲方面に於ては空氣乾燥せるに加へて道路粗惡にして運搬の際漏出するもの多きが故に足重品たることは極めて必要なる條件なり、香港糖は實に此の足重品を製出し日本糖は之に反す。近年香港糖に眞似て足重品の製造進歩したるが未だ及ばざるなり。

(四) 販賣方法 香港糖は多量の現物を倉庫に收め一定の支那商人をして委託販賣せしめ需要に應じ隨時適當量を搬出し相場變動する

時は之に應じて適宜指値を變更し以て受託支那商をして相場の變動より來る損失を負擔せしめず賣上高に對し一定の口錢を支拂ふが故に利益多からんことを望む時は支那商は一意専心賣込に努力すれば可なるを以て其販路は益々擴張せらる。然るに日本糖は大連又は營口沖着を以て打切り勘定なし盛んに先物賣買を行ふ。故に輸入業者は自ら危險を負擔して見込買付をなさざるべからざるが故に充分賣行見込ある時にも單に其一部を買入るゝに過ぎず屢々商機を逸する虞あるなり。

(五) 自己所有船舶の有無 香港糖は自己の所有船舶により一時に多量の輸送をなすが故に運賃の低廉なるは勿論なり。日本糖には自己の所有船舶なく別に船會社の船舶により運搬するが故に運賃の比較的高價なるは免れざる所にして常に糖業聯合會と船會社とが接渉協定する所以なり。

香港糖は低廉なる運賃は之を期待し得るも

一時に多量の入荷をなすが故に受記者たる支那商のねらふ所となり價格の低下を要求せらる。斯くて支那商は低價にて受託しおきながら先の高き價を以て販賣し其差額を私腹する虞あり日本糖は適當量を次ぐに積送し來るが故に先に輸送せられたるもの先づ需要せられ然る後又積送し來るが故に船會社が適當の賃率を以てすれば此の點は恐るゝに足らずと稱するものあれども概言して香港糖が有利の地位にあるは疑ふべからず。

(六) 關稅 支那輸出の爲用ふる原料糖は日本も多くは瓜哇糖なり香港糖が和蘭標本十八號位の品を以て原料とするに反し日本糖は關稅關係により十五號未滿品を以て原料となし之に少量の十八號品を混合し精製するなり。即ち日本の砂糖消費稅は第二種十五號未滿品は百斤に付五圓なるが第三種十八號未滿品は七圓なるがためなり。されば香港糖に對抗せんには十八號未滿品をも原料糖

として大いに利用し得るやう第二種税五圓に低下せしめよと論ずるものある所以なり。精製の難易は必ずしも號數(色相)のみには依らざれども一般に色相白きものは黒きものに比して容易なりとす。此の點も亦香港糖は有利なりと云ふべし。

(七) マーク 何れの國を不問マークは尊重せらるゝが特に支那人には此の傾向著しく香港糖は古くより賣り擴められたる結果其のマークに對する信用は新しき日本糖のマークに對する信用よりも遙に大なるものあり。滿蒙市場に於ける香港糖の主なるマークは

B
 ◆ H X O W 等にして日本糖中主なるもの

は大日本製糖會社の SL
 ◆ SH 臺灣製糖會社の E M 明治製糖會社の Y P R O 鹽水製糖會社の T T

の (A) 帝國製糖會社の B B 等なり。

最後に日本糖も香港糖も共に瓜哇糖を原料とするが故に瓜哇原料の買入値段は兩者競

争の勝敗に大なる影響を與ふことは又最も注意すべきことなり。

第四 瓜 哇 糖

從來瓜哇糖は一旦香港若くは日本へ輸入し精製せられたる後精製地名を附して再び輸出せられたるが大正三年始めて大連に菓子原料として直接少量の瓜哇白双 (Hard Supesist White) の輸入を見たり。六年に至り南滿製糖會社は原料用として中双 (Head Suyat) 及び黃双 (Muscovados) を輸入し茲に始めて大口輸入の端開け七年下半年より八年初頭にかけ露國政府が二十萬布席の無税輸入會を發布してより白双約六十萬擔輸入せられ當時瓜哇糖の價暴落し居たれば益々瓜哇糖輸入の趨勢を助長せり。然るに北滿、西伯利地方は豫想の如く有望ならず俄かに市況不味となり一時は大連を始め長春、哈爾濱に推貨山積し手持商人は其處分に窮し小資本家の倒産するものも出で其後大部分を歐洲へ再輸出し漸く此の窮境より脱出するを得たり。大正八年一萬五千餘

噸の歐洲向大連輸出は這般の消息を語るものなり。斯の如き瓜哇糖の輸出は露國糖の恢復と南滿甜菜糖の確立によりて其必要を見るに至るべし。

第五 移入支那產糖

往時支那糖は幼稚ながら頗る繁榮し各省の全產額一千萬擔と推算せられしが今や衰微し其總額四百五十萬擔となり日清戰爭前の如く輸出能力なく滿蒙市場に於ても香港糖と日本糖とに壓倒せられ昔時繁榮の面影を止めず。

其原因は生産組織幼稚不完全にして従つて製品は劣惡となり政府の保護獎勵（例へば民國三年の植棉、製糖、牧羊獎勵、條例公司保息條例、糖業改良委員章程、整頓糖業辦法）が舊式製糖法に何等恩惠の見るべきものなく、又新式製糖事業を起さんとするも支那民間には其資金と知識とに缺乏し偶々これあるもそれは官人の企業にして官臭を帯び利益を擧ぐるごと困難なるもの多し尙ほ民國の税製は内地果の發展を阻害し外國糖の輸入を誘致するが

如く組織せられ紊亂を極め居るが爲なり。

由來滿蒙需要赤糖は殆んど營口の獨占にし支那產糖は民船貿易による南支那商人の來任によりて甘蔗肥料として豆粕の積出をなし爲替決濟をなし來れる遺物に外ならずと云ふ。

支那產糖移入狀況（滿蒙實業彙報十年十二月號所載）

（載）撫建

大正 年次	營口	大連	安東	計
1	西、四九〇	—	一、二六〇	壹、六五〇
2	一九、六七二	—	四五〇	二〇、〇七六
3	八、二七三	—	二五〇	八、七五七
4	二〇、〇六一	—	四六〇	二〇、四七二
5	二、三四	—	三七七	二、七七一
6	二、八四	—	五八七	二、七七一
7	三、六七	—	—	三、六七
8	不明	—	—	—
9	—	—	—	六、七九

第二節 北滿の輸移入糖

第一款 總 說

北滿には露國の鐵道あり露國の海港を近く

に有し露本國は甜菜糖の大産地なるが故に露國糖は輸送され來るべく北滿には日本人支那人に異りたるカウカシアン(Caucasian)種の露人(當地方露人の砂糖消費量は一人宛平均二十斤餘と推算せらる)が多數在住するが故に其嗜好に應じて露人趣味の砂糖が輸入せらるべきなり。北滿の人口は勿論支那人を最多とし最近彼等の發展活躍は見るべきものありと雖も未だ支那人文化の程度は低く従つて其砂糖消費量は未だ甚だ高からず故に北滿の砂糖事情には支那人的傾向よりも露人的色彩の濃厚なるを認むるなり。

歐洲大戰迄露國は堂々の歩武を進めて政治軍事上將又經濟産業上著しき活動をなし將來の計劃をおきたるが彼の大戦は遂に獨逸に向けたる鋒芒を轉じてロマノフ王朝に向け慘憺たる光景を現出して露帝國は崩壊し産業上の發展は阻止滅殺せられ殆んど衰滅に歸したり。彼の如く繁榮せる本國の甜菜糖業も亦此の趨勢を免れ得ざりき。本國の境亂は北滿の政治

産業運輸の混亂、沈滞、難澁を誘致し砂糖事業に於ても戦前とは非常なる變化を致せり。此の變化は南滿のそれよりも根本的にして戦前日本糖が活動の餘地乏しかりしに此の時大活劇を演じ今後亦大いに其北進策を講ずべき必要を生じたり。

第二款 北滿需要糖の品種

北滿洲には溫暖の季短く冬季永く戸外には朔北の風吹きすさび、風靜かなる時は平和なる銀雪の世界を現出す。當地の露人は吾々が春の來るを喜ぶが如く冬の來るを歡喜して迎ふとぞ。彼等は室内に「ペーチカ」を焚きて「サモワル」を圍みて暖き茶を喫しつゝ夜を更けて語ることを好むが故なり。露人の喫茶性は氣候の生理上に及ぼす關係からが世界風俗誌上定評ある所なり。然れ共此の茶に甘味の關係するなければ此に論及の必要なけれ共露人は之に多量の角糖を投じ且つ甘味強き「キヤラメル」「チョコレート」「ジャム」等を食ふ。角糖は露人にとりては必需の商品にして次い

では棒糖、双目愛好せられ車糖は喜ばれず。

哈爾賓日本商陳列館にて目撃したるが其角糖たるや(當地阿什河製糖廠出品)直徑七八寸砲彈型の堅固なる双目の結合體にして之を一種の鋸にて切りたるものなり。米國品も双目製なりしが小さくて見劣りし日本品に至りては脆き車糖の小型品にして貧弱なりき。即ち露人は此の硬き角糖を茶に投じそれが徐々に溶け行くを悠々眺めつゝ喫することを好むが故に日本品の如き脆弱なるものは彼等の嗜好に適合せざるなり。明治製糖會社の角糖が戰時當地地方へ輸入せられたれど、それは戰時止むを得ざる需要にして包装の不完全と相俟ちて近時其姿を見ざるに至れり。

始め角糖の充分なりし平時は双目の需要は下級民が角糖代用とするか菓子原料とするにあり。試みにチューリン商會の菓子を喫せば其甘味に驚くべし。

双目の需要は從來多く之にありき。

車糖は當地方に多數在住する支那人に供給

せられ一時露人は應急的に其上物を用ひたることありしが瓜哇白双が大量輸入せられてより之に移れり。支那人は殆んど角糖、双目を使用せず車糖(赤糖を含む)に限り主として哈爾賓を經由分布せるものにして大正五年には南方より同地に集散する赤糖一萬俵、砂糖(物品多し)三萬俵内外にして精糖中香港四、日本六の比例なりしと云ふ。

第三款 北滿砂糖輸入經路

北滿砂糖輸送機關としては黑龍江、松花江、烏蘇里河の水運あれども運航期間短き憾み多し。鐵道は河川運搬の不可能時(尤も氷上運送行はる)之を補ふのみならずそれ自身極めて重要なり。即ち西には歐露、西伯利より來る後貝加留鐵道あり、南には南滿鐵道ありて遠く大連、營口、安東の三海港に連絡し、東には烏蘇里鐵道ありて近く浦鹽に通じ北には黑龍江鐵道の走るあり。境外に此等諸鐵道と接し北滿境内には東支鐵道の西部線南部線東部線あり將來北に向ひて賓黑鐵道の開設を見

んとす。

以上交通機關の中北滿の砂糖貿易に密接なる關係を有せるは東支線は勿論、後貝加留、南滿、烏蘇里の三鐵道及び松花江なり。此の外冬季馬車による輸送は北滿境内のみならず境外に對しても重要なり。東支鐵道南部線が運輸混亂難澁し長春に堆貨山積したる時馬車により哈爾賓へ輸送し又は香港糖が大膽にも鐵道によらず馬車によりて奥地に進入するが如きは其例なり。西の滿洲里、南の又寬城子又は長春、東の方浦鹽より通する綏芬河等は砂糖輸入の門戸となり哈爾賓は其大中心をなすものなり。

第四款 戰前北滿砂糖輸移

入の數量的考察

(一) 海路浦鹽に來る砂糖

一九一二年……二九六、五三二擔
 一九一三年……二五三、六二三擔商港部調
 一九一四年……二九八、三三六擔
 即ち平時浦鹽には年額三十萬擔に近き輸入

糖あり。浦鹽附近及烏蘇里、黑龍江鐵道沿線の諸都市に消費せられニコライエフスク港カムチャツカ地方に輸送せらるゝ外北滿に入り分布するものあり。即ち一九〇八年一九〇九年浦鹽方面より哈爾賓市場に現はれたる數量は一四、六〇八擔、四五、〇八九擔なりき。又浦鹽より東支線を通過し後貝加留鐵道に連絡せる滿洲里の砂糖は(東支線營業統計)

一九一二年……五六、二〇六擔

一九一三年……六一、〇〇九擔

一九一四年……五八、七七〇擔

一九一五年……四、二五八擔なりき。

今北支那貿易年表によれば綏芬河の輸入糖は

大正五年……七七四擔

大正六年……三、一七二擔

大正七年……四擔

大正八年……九九六擔

大正九年……九〇五擔を算せり。

浦鹽輸入糖の品種は角糖棒糖双目にして戰前は殆んど全部露國義勇艦隊及び其の他の船

船舶により黒海オデッサ港よりの積出にかゝり
米國品も獨逸品も少量の入荷に過ぎざりき。

(二)後貝加留鐵道により露本國又は西部西伯利
と北滿とを出入する砂糖を滿洲里について見
れば後貝加留鐵道より東支線に連絡するもの
を露國糖の北滿輸入となすことを得べし。即
ち東支線營業統計によれば

一九一二年……………四〇〇擔

一九一三年……………三、一六三擔

一九一四年……………五、七六九擔

一九一五年……………二〇、一二二擔

と非常なる増加を示せり。是れ戰亂以來、
浦鹽輸入糖の西行は著しく其數量を減少し戰
前の一割にも達せざりしかば其の缺を補ふた
め陸路露國糖の入り來りしものなり。

又後貝加留鐵道により一九〇八、一九〇九
の兩年哈爾濱に現はれたる露國糖の數量は二
七、八五三擔二七二九擔なりき (東支線營業
部調)。因に北支那貿易年表によれば

大正五年……………二四、三三三擔

大正六年……………七、五九九擔

大正七年……………五七六擔

大正八年……………〇

大正九年……………三八四擔

又支那海關統計によれば六年七、五九九擔
なりしもの七年には僅か一三擔となりて現は
れしは北滿に露國糖の配給次第に減少せる一
證左にして實に大正七年末には露本國よりの
供給は海陸共全く杜絶せり。

(三)南滿線によりて北滿に來るもの

長春寬城子に接續され北上する砂糖は香港
糖及日本糖にして各種類を含み内車糖は哈爾
濱を中心として東支線沿線に散在する約二十
萬兩の支那人の消費其他に充當せられ戰前二
萬擔を算したるが爾來逐年増加せり。即ち東
支滿鐵連絡數量は(滿鐵運輸部調 擔建)

大正一年 九、七八三 二年一八、九一五

三年 二一、三一九 四年 四一、二

六二 五年四八、三七一 六年四六、

四〇二 七年八六、三〇五

戰亂以來長春は哈爾濱への伸繼市場として逐次物資の配給輸送をなしたるが常に輸送常態難澁を來したる關係上長春の堆貨は著しく増大し或は馬車により或は舟楫により其北上を促進したれば實際は右表の數量により多くの現爾資向出荷を見たり。殊に大正七年夏より大連に輸入したる爪哇白双糖は秋に入りて愈々大量増加をなし滔々北滿、西伯利へ仕向けられたるより推定し該白双は七年度哈爾濱へ十萬俵の入荷ありしと稱せらる。

以上の三經路によるものは最も重要にして北部、東南部よりの輸入は北滿の糖界に影響すること少く其數量は甚だ小なり。今支那海關統計によりて其輸入狀況を知る事左の如し（増建）

大正	三姓	愛琿	長春	龍井村
1	八六七	一、三六八	一一、四〇	二、二五五
2	五四七	九六三	一、二四	三、四九〇
3	四二	三〇二	九二〇	二、四四〇
4	二六	八九	七五	一、四三二

右の四海關の外滿洲里、綏芬河の二海關を加へて北滿各關の輸入糖は往年七萬擔餘を算したるが近時減退の傾向を示せり。是れ露國糖の海陸輸送の杜絶と南滿經由糖の増大を示すものといふべし。表中大部分は精糖にして赤糖及氷糖は少量なり。

第五款 戰時北滿の砂糖事情

大戰時中は露國甜菜糖事業の衰微と北滿歐露間の交通杜絶とにより需要糖は從來の超越品と阿什河產品のみなりき。而も露人の國民的飲料とも云ふべき「ウオツカ」酒の發賣を禁止したる反動として砂糖の需要急増したために外糖の供給を仰がざるを得ざるに至れり。此に於て全露食糧委員會は極東西伯利へ外糖の輸入を奨勵することに決し一九一七年二月二千萬布度の無稅輸入令を發布せり。當時露貨は低落一方なりしかば益々輸入促進の傾向を

示しこゝに日本双目糖は北滿及び黑龍沿海地方へ輸出せられぬ。されど其數量過少なりしかば鈴木商店は爪哇糖の暴落を好機とし大正七年七月爪哇白双を買付け當地方へ輸入をなしたるが其の有利なるを思ひて日本商人の之に走るもの甚だ多く北滿及び黑龍江沿海地方は八年以來白双糖の洪水を現出せり（これは其後歐洲へ再輸出し漸く緩和するを得たり）然るに一方鐵道輸送は圓滑を缺ぎ大連、長春哈爾濱には堆貨山積し相場下落しつゝあるにチタ、イルクーツク方面にては砂糖空乏して相場狂奔するが如き有様なりき。

双目の輸入は双爾賓、浦鹽なりしが運輸混亂難澁したるため或は馬車を用ひ或は軍用品の名目を以て漸く輸送したるが、オムスク政府が砂糖專賣制度を實施してより當局の手になる輸送は幾分緩和せられたり。

此のオムスク政府の砂糖專賣法は大正七年十一月發布せられ其趣旨とする所は砂糖需給の調節、分配の圓滑を期すると云はんより寧

ろ多額の消費税を課して政府の財源たらしむるに近かりき。專賣法は哈爾濱東支線一帯は支那領なるため施行されざりしが專賣局の砂糖買付場所は浦鹽の外、哈爾濱をも指定し消費稅務署の倉庫は寬城子、哈爾濱にも置かれたるが故に北滿の砂糖事情に大いなる影響を與へたること言ふを俟たざるなり。

七年十一月初旬專賣法を施行してより八年三月に至る政府の買上數量は約二十六萬擔に達し救済の第一歩を踏みたるが更に需給の圓滑と根本的市價昂騰防壓策として八年四月甜菜糖業の獎勵規則を發布せり。

現狀を以て果して好成績を挙げ得るやはしばらく疑問とするも北滿に於ける二甜菜糖工場と共に將來日本糖の北進について注目すべき事象ならずとせず。

第六款 東支線と北滿砂糖分布狀況
東支線重要驛の砂糖發着高によりて北滿に於ける砂糖の分布消費狀況を概察することを得。即ち東支線營業部統計によれば（據建）

(一) 發送狀況

發送年次	一九一二年	一九一三年	一九一四年	一九一五年
阿什河	三〇,五三	三三,〇三三	四三,八六四	四七,五七九
寬城子	四,三八三	四,九二	二七,二五	三三,七三
哈爾賓	一四,五三	三,七九	一七,八七	一四,二九五
滿洲里	五,七〇七	六,四八	五,九三三	四,四〇四
其他各驛	一四,七九〇	七,五七	五,八七〇	三,四〇四
計	一六,〇三	一五,八七	一四二,六四〇	一五,四二四

阿什河驛發送量は同地製糖廠の製品なり。

呼蘭製糖廠は一九一五年僅か一千布度を製造したるに過ぎず鐵道發送の分なしといふ。阿什河も寬城子も滿洲里も共に其發送量北滿第一の大都たる哈爾賓を凌ぐは其等が通過驛に

(二) 到着狀態 (摺建)

到着年次	一九一二年	一九一三年	一九一四年	一九一五年
哈爾賓	九,七〇	二二,九二	八,四五九	九五,二六四
滿洲里	四三,八六	六,五九〇	七〇,一八六	一〇,八四五
齊々哈爾		三,八四七	三,六七	五,一五五

して消費量の比較的少きを意味し哈爾賓は市内にて最も多く消費し其他を附近に散布することを示し此の關係は次表により更に明瞭なり。

海拉爾	四、五〇一
海林	四、四九七
雙城堡	四、四八六
橫道河子	二、七六五
綏芬河	一、〇五四
對青山	一、九二六
阿什河	五、四六六
布哈多	一、五七一
其他各驛	二六、二八〇

三三、八三四

第七款 北滿の砂糖市場（中略）

第三章 滿洲の土產糖

第一節 南滿の甜菜糖

第一款 總說

滿洲の土產糖とは南滿の甜菜糖、北滿の甜菜糖を意味し現今其產出數量は遙か輸移入糖に及ばざれども其發展活動を將來に望むことを得。

特に南滿の甜菜糖業は我國人の經營にかゝり臺灣糖が激増し行く我が國民の消費力を充

四、〇四七	三、三九五
四、五二二	三、二六六
三、三九六	二、五七八
二、四九三	二、一五三
五、六六	二、〇三三
一、〇三三	一、九〇三
二、九三六	一、六七三
一、九五八	一、四四五
一八、〇七一	一四、九四六
二〇一、二六一	一四、七五五

すこと能はざるに至りしかば一朝事ある時、日本糖業獨立のため極めて重大視すべきものなれども今日の本分は滿蒙全土に充滿する支那人、北滿に多量の消費を擁せる露國人、及び増大し行く在滿日本人に對する甘味を滿洲其土地に於て廉價、豊富に供給するにあり。

日本國民の經濟的發展と日支國民の鞏固なる結合のため余は希望に輝き乍ら斯業の多幸なる成長發展を祈るものなり。

は實に明治卅九年に始まり。即ち奉天上將軍趙爾選が兒玉大將の勸誘により日本人技師を招聘し奉天に農事試驗場を設立し甜菜の試作をなしたるを嚆矢とし爾來數年にわたる研究の結果好成績を得て趙氏は北京政府に援助を求むると同時に一方日支合辦による一大製糖工場を目論見たるが一部支那人の反對に遭ひて成立を見るに至らざりき。其後奉天農事試驗場、長春領事館が試作したる外、餘り顧みられざりしが大正二年滿鐵產業試驗場の設立を見るや翌三年より本分場各地に於て試作をなし、四年之を擴張し各地の苗圃に及ぼし

五年四平街奉天其他數ヶ所の農家に委託して栽培試驗を行へり。斯くて成績の良好なるを認められ大正五年末奉天に南滿製糖會社先づ設立せられ續いて常國製糖會社などの滿洲進出を傳へられ、十一年には鐵嶺に南滿製糖會社の分工場設けらるゝに至れり。

第二款 南滿の風土と甜菜

甜菜栽培上至大の關係を有するは氣候なり今南滿に於ける氣候狀態の調査（滿鐵產業試驗場の）を見るに甜菜栽培期間に於ける氣溫及雨量は次の如し。

氣溫攝氏		第一			第二			第三		
		四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月		
長春	春	六、四	一四、五	一九、一	三、六	二、六	一四、三	六、〇		
公主嶺	春	七、六	一七、三	二二、〇	二四、三	三三、〇	一七、一	一〇、二		
奉天	天	八、五	一五、六	三、二	二四、二	三三、二	一六、五	九、〇		
雨量耗	耗	第一	一	期	第二	期	第三	期		
長春	春	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月		
		三、八	五、八	二四、二	三三、六	一二、二	五、二	三、六		

公主嶺	一八四	五、三	二五、九	二〇五、七	二六、四	三、九	三、六
奉天	三〇、七	五〇、八	八九、四	一五、七	一五、三	九三、九	四〇、〇

之を甜菜標準氣候に對照すれば

第一期 第二期 第三期

氣溫	二〇、七	一八、八	一六、五
雨量	七、〇	二四、〇	一〇〇、〇

夏季に於て氣溫稍々高く雨量又多く中秋以後に於て氣溫俄かに下る嫌あれども收穫期に入りて降雨少く晴天打續き、空氣乾燥せる等甜菜栽培上稍々理想に近き氣候狀態にあるものと稱するを得べし

之を滿洲の土質に考ふるに地形概ね平坦且つ近世層に屬し地層深く地味豐沃なり、唯諸河川の流域地方は水線淺く地盤低く排水不良にして低濕の地なきに非るも一般に佳良なり又往々アルカリ性を帶ぶるものあれども其程度殆んど甜菜作に影響せずと云ふ。されば各地栽培試験の成績は反當收量平均七八の貫、含糖量一五、三四%を示し甜菜栽培適地の渺からざるを知る。之を甜菜糖業國たる歐洲各

國に於ける平均反當收量

白耳義	八〇二、六貫
獨逸	七八九、六貫
瑞典	六九三、六貫
佛蘭西	六六五、一貫
奧地利	六四五、二貫
露西亞	三七九、六貫

と對比せば露西亞に比し遙かに良好なる成績を挙げ獨逸の七八九、六貫と匹敵するを見るなり。

更に甜菜の品質についてはメルカー博士の檢定にかゝる「グイルモーラン」種「クラインワンスレーベン」種に對照して滿洲糖の含糖量一五、三四%は聊かの遜色をも見ず。
(メルカー博士の檢定表略す)

要するに甜菜は滿洲の風土氣候に適する作物なり。若し經濟的關係の如何に至りては之を滿洲在來農家の耕作にかゝる高粱、粟、大

豆の三作物に比し遙かに有利にして之は次に記せる産業場の調査成績に明なり。

第三款 甜菜糖の經濟試驗

大正五年公主嶺産業試驗場に於て「ヱイル モーランス インブルーブド ホワイト」種一天地(我が六反歩)の菜根收量四、五三〇貫を基礎としたる栽培經濟試驗によれば菜根一貫目の價格を金壹錢八厘(千斤貳圓八拾錢の割)と見積り、收入八拾壹圓五拾四錢、支出六拾四圓參拾貳錢參厘、差引拾七圓貳拾壹錢七厘(反當貳圓八拾六錢九厘)を計上し且つ同一計算法による同年同試驗場に於ける滿洲在來重要三作物との收支比較は次の如し。

收入	支出	差引純益	同反當關算
大豆	四、一六〇 ^円	四、三三〇 ^円	〇、一七〇 ^円
高粱	四、〇三〇	三、三三二	六、六九八
粟	三、〇九〇	三、二六二	〇、一七二不足
甜菜	八、五四〇	四、三三二	二、二〇八

(備考)同年度經濟試驗に於ける粟は虫害のため成績甚だ不良にして大豆も亦天候の

關係上收量少かりき。

此の試驗成績は完備せる試驗場内に於ける不經濟的試植にして之を頑迷なる支那農民一般耕作の下に委して幾何の成績を擧げ得るや古來極端なる重農主義と積年の惡政とは農民をして保守退嬰的ならしめ近時自作農跡を絶ち全然小作農となれる憐むべき彼等を拉して高粱、大豆の重要作物を止め甜菜にかはらしむるには大いなる困難を伴ふべし。されど年月を経改良を施し甜菜の有利なることが實地明瞭に證據立てらるれば如何に頑迷なるものも之に従ふは勿論にして現に南滿製糖會社の宣傳、獎勵、補助によりて甜菜栽培を喜ぶもの次第に多くなれりと云ふ。

南滿製糖會社は、大正六年より事業を開始し今日迄六年間繼續し居るが最初は種々なる障礙のため成績甚だ面白からず、例へば第一年度は第一回豫想收穫高一億萬斤が其の五分の一なる二千百餘萬斤の實收となり第二年度一億二千萬斤の豫想が二千五百萬斤の實收に過

きざりしが如く前途を悲觀されしが近時會社自身も經驗を積み改良を加へ、農民も亦甜菜栽培の有利なるを知ると共に技術の進歩を來し、本年の豫想は頗る良好なりき。即ち滿蒙實業彙報十一年八月號の載する所によれば從來の平均は一天地一萬五千株内至二萬株の收穫なるが本年は三萬株の甜菜を得べしと。殊に目下は農民が作れる全部の菜根を會社が買入れ又低利の資金を前貸しするを以て彼等農民は次第に之を喜ぶに至れり。斯の如く耕作方面は漸く安全に近づきたるを以てこれより大いに工業的方面にも改善を施して活躍の時代に入らんとす。

第四款 南滿甜菜糖と他

糖との比較

他地方甜菜に關する多くの資料なく又生産費の點などは會社の祕密に屬するものありて比較研究するに頗る不便にして又甚だ不完全なるが少しく之を考察せんと欲す。

今甜菜買入値段につき北海道の甜菜と比較

するに南滿製糖會社の本年度買入値段は千斤につき小洋票六元なり。即ち日本金の約四圓八拾九錢なるが故に北海道の製糖會社が六圓八拾錢にて買入るゝに比すれば約貳圓の差あり。

而も石炭、勞銀低廉なる故更に有利の地歩にありと云ふべし。

次に朝鮮山東などの甜菜と比較すれば播種期に雨量少き缺點あれ共それ等の如く甚しき蟲害なく又朝鮮が山勝ちにして對抗作物が平地にては高價なる米なるに反し、滿洲は沃野萬里對抗作物も比較的廉價なる大豆、高粱なるが故に此の點に於ても南滿の甜菜は有利の地位にあり 又北滿の甜菜に比しても彼は寒氣嚴しきため耕作上南滿のそれに敵し難しと稱せらる。南滿にては比較的古くより調査研究せられ試験設備も完全せる故日本甜菜糖確立の場所は第一に南滿に於て見るべきか。

更に當地に輸入せらるゝ臺灣甘蔗糖と比較するに臺灣糖が生産費拾五六圓を要する時之

は拾圓にて足ると稱せられ又臺灣の甘蔗より一〇%以上の歩留を保持せるは比較的少かりしが南滿の甜菜は一五%の歩留を有すと云ふ(尤も今迄の經驗によれば平均一二%なり)而も滿洲は前述の如く土地廣く肥え對抗作物廉價なるに臺灣は土地狹く最も高價なる米を對抗作物となすが故に臺灣糖に對しても有利の地位にあり。

第五款 南滿製糖會社の概況

同社は甜菜の栽培並に精糖を目的とし大正五年創立せられ本社並に工場を奉天に置き耕

植付反別 甜菜收穫

初年度 (大正六年)	四〇,〇〇〇畝	約二〇,〇〇〇擔
二年度 (七年)	四三,〇〇〇	一七,〇〇〇
三年度 (八年)	二〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇
四年度 (九年)	四五,〇〇〇	四五,〇〇〇
六年度 (十一年)	六〇,〇〇〇	
七年度 (十二年)	三〇,〇〇〇	豫定

即ち初年度に比較すれば年々進歩しつつあれども其最大收穫たる四年度四五〇,〇〇〇擔

地は附近一帯なり。資本金壹千萬圓拂込資本金五百萬圓、製造能力は甜菜消費一日五百噸精製能力一日百噸なり。

同社甜菜の成績は創業以來日未だ淺く耕作者の經驗も充分ならず又時に旱魃、降雨過多のため未だ充分の結果を見ざりしが次第に良好なる成績を挙げ南滿甜菜糖業に一道の光明を認むるに至れり。

今創業當初よりの收穫、植付反別、歩留、原料糖出來高を大連商業會議所の調査によりて見れば、

歩 留 原料糖出來高

不 詳	不 詳
二%	約二〇,四〇〇擔
一〇%	三〇,〇〇〇
二一、五%	五〇,〇〇〇
二% 豫想	

を以てしても甜菜作業能力の半にも達せず又其精製能力に比較すれば自作の原料糖は到底

所要の額に達せざるなり。されば補給を他糖に仰ぎ初年度以來年々十餘萬擔の原料糖を臺灣、爪哇に買付け精製しつゝあり。即ち同社製品の市場供給額は次の如し。

初年度（大正七年） 約二〇、〇〇〇擔

二年度（八年） 一四、〇〇〇擔

三年度（九年） 五、〇〇〇擔

大正九年度に於ける供給激減の原因は財界不況による賣行の不振にあり。

次に同社製品の販路如何を考察すれば大正七年五月より十二月に至る出荷量十六萬擔中長春へ仕向けたるもの六萬三千擔、哈爾賓へ三萬一千擔、奉天へ二萬九千擔、安東へ七千擔、大連營口へは夫々六千擔を發送し、長春哈爾賓の北滿市場を第一として、沿線各地に配給し、安東、大連、營口の三開港に及べり而して之を品種別に見れば精糖約九萬擔双目約七萬擔にして双目は北滿向に限られたり次に大正八年上半年期（一月より六月）の出荷高は六萬九千擔にして其中長春へ四萬擔、哈

爾賓へ四千擔、奉天へ一萬一千擔、安東、公主嶺、吉林、撫順等へは夫々二千擔内外を仕向けたる。之を品種別に見れば精糖四萬二千擔、双目二萬七千擔となる。

斯の如く大正七年下半年より八年上半年迄の販賣は長春、哈爾賓等の北滿向、全數量の六割強を占む。之により南滿糖の販路は多く北滿にして更に本年より鍊嶺工場が運轉せらるれば益々此方へ進出すべし。

今滿洲糖界の兩雄たる日本糖及び香港糖と比較するに南滿糖は地の利に於て前二者に對し大いなるハンデキャップを有し殊に其生命なる甜菜糖の成功確立を見れば外國糖を滿洲市場より驅逐すること必ずしも難事にあらず。されど現在の如く大部分の原料を爪哇、臺灣に仰ぐならば其製品販賣に於て有する地理的優越は原料買付に於ける不利と相殺して餘す所なし。而して其製品は甜菜糖と甘蔗糖とを混合せるものにして尙ほ多少の臭味を脱せず且つ足工合も亦輸入糖に劣るが故に現在及び

近き將來は敵糖に一籌を輸せざるを得ず。

第二節 北滿の甜菜糖

南滿の甜菜糖業が南滿製糖會社によりて代表せらるゝが如く北滿の甜菜糖業は阿什河、呼蘭の二製糖廠によりて代表せらる。其起源は露人の北滿發展以來のことにして日露戰前既に着目計劃せられし事はミハエル オギエフスキーの經驗談等によりて推察し得るなり。北滿の甜菜糖業は南滿のそれよりも早く起りたるが吾々に關係する點に於て又將來の伸長發展力に於て南滿の如くしかく重視せられざりしが今後北滿より西伯利に飛躍せんとする人々の注意を促すべき好個の題材ならずとせんや。(中略)

第三節 滿洲の土產糖と輸移

入糖との比較

支那海關統計により大正元年より九年に至る九ケ年間に南滿三海港輸入糖一年平均額を求むれば五〇〇、三五八擔なり。

次に滿洲の土產糖は南滿の甜菜糖大正七年

より九年迄の三ケ年平均額を求むれば三三、四六七擔にして北滿阿什河の甜菜糖は凡て原料を甜菜と見て明治四十三年より大正四年に至る七ケ年の平均額を求むれば三五、八九二擔にして呼蘭の甜菜糖は事業不振にて確實なる統計なれども推定によれば五萬布度即ち一三、六五〇擔なるが故に、二三社合計八三、〇〇九擔となる。

斯くて輸入糖と土產糖とを對比すれば土產糖は僅かに前者の六分の一に過ぎず。浦鹽滿洲里等より來る北滿の輸入糖を加算すれば更に其割合小となるべし。

故に現今滿家の糖界を支配するは輸入糖にして滿洲の土產糖は未だ幼年の時期を経過し居らず。然れども此の幼年兒を養育する土地は歐米の甜菜國に比して決して遜色なく此の幼年兒が巨大漢として活躍するは養育の勞費と歲月を待つて始めて見るべく今や彼の發育狀態は良好にして特に南滿に於て好望なり南滿甜菜事業の好望は日本の産業經濟の發展に

して産業經濟の發展はやがて日本の滿蒙に於ける根柢深き永遠の繁榮を意味すべきなり。

滿洲賞金懸賞論文

審査講評

滿洲賞金懸賞論文募集の發表せられたるは昨大正十一年九月夏期休暇後始業當初にして應募締切を同年十一月末日となしたるが之に應募せるは左記の一編なりき。

滿蒙砂糖事情

田中 行雄

本論文は四章より成り、第一章は滿蒙砂糖事情の概觀にして之と支那産の赤糖が獨り此地方の販路を占めたりしが、既にして香港糖侵入して漸時其勢力を擴め、日露戦争後に至りて日本糖新に此地方に販路を開拓して香港糖と激烈なる競争を續け、歐洲大戰起りて世界貿易上變態を生ずるの機に乗じて一時は遂に香港糖の勢力を壓伏したるも大戰後に至り香港糖は再び其の勢力を挽回し、今は彼れ寧

ろ日本糖に對して優位にあるの狀勢を略述し且滿洲土産の甜菜糖業の勃興に注目し以て問題を提起し、第二章に於ては南滿北滿及び東部内蒙古の輸入糖につき品種、數量、輸移入の經路を細叙し、其市場並びに取引狀況にも及び、第三章には南北滿洲に起りつゝある甜菜糖業を論究し、第四章に於ては滿蒙の糖界を支配するものは香港糖と日本糖となるが、前者は品質、並びに販賣法等に於て優越のみならず、積年の根據あり、日本糖に對し恐るべき強敵なり、其間にありて日本糖が一時優勢を占めたるは滿蒙に於ける日本人の特殊の地位勢力とダンピング政策によれるものなりしが、今や形勢一變して著しく香港糖の壓迫を受けるに至れり、之に對する方策としては砂糖官營又はトラスト組織により、強大なる統一的勢力を以て適當の商略を行ふにあれども、又上海其他の適當なる開港場に邦人經營又は日支合辦の精製糖工場を設け支那滿蒙本意の砂糖の製造販賣を行ふも一方法なりと論

結せり。

本論文の長所と見るべき點を擧ぐれば、(一)大體に於て組織的系統的に主題を取扱はんと力めたること、(二)主題の論究に徹底的ならんことを期したること、(三)主題の究明上必要なる各般の事項及び各地方の事情につき略ぼ普遍的に叙述説明をなしたること、(四)統計は大體に於て使ひこなし居ること、等にして、其缺點と認む可きは、(一)世界砂糖市場に於ける我國の地位と之に對して滿蒙が如何なる關係にあるか、其砂糖消費量の過去現在及び將來の見込は如何につき劈頭第一に論すべきに其事なきこと、(二)砂糖貿易の金融關係を詳明に叙述せざりしこと、(三)各地方の事情につきての叙述は煩冗雜駁の嫌あること、(四)參考書及調査資料を卷頭に記載せるも、各章節に於て何れの部分は何れの書によりたるかを明かにせざりしこと等なり。尙ほ土產の甜菜糖業の興起は將來の砂糖貿易に最も重要な關係を有するものあるを以て土壤の適否、生産費の多少等に

つき更に一層の研究あるべきを望むは此種の論文にとりて決して過大の期待と云ふ可からざるなり。

全體として文章明快暢達ならず、誤字多く、文句の過誤又は拙劣なる個所少なからず、爲に本編の實質的價值を損傷せるは遺憾なり。然れども一般學生の好學心研究慾の動もすれば萎靡不振の兆ある今日に於て自發的研究者の魁となれるのみならず、募集發表より締切まで僅かに二ヶ月餘の短少期間に於て起草せるものとしては其價值略ぼ推獎するに足るものあり、以て滿洲賞金設定の主旨に協ひ、之を授與するに不適當ならずと認む。

右審査評定す。

大正十二年一月二十八日 滿洲賞金懸賞論文審査委員

教授 田崎 仁義

同 前田 稔靖

同 下田 禮佐